

開発という分野に働きかけるアクターは非常に多様であり、  
それぞれの意図が必ずしも一致しているわけではない。そういった  
視点から、筆者が挙げている課題1と2は理解できた。  
しかし、課題3について、「必ずしも公共人類学は、研究から  
実践へ切り替えが必要なのか?」と思っただけ。筆者は、「実践  
をあらかじめ計画しておいて、その目標にあわせて必要な研究を  
することが良い」と提言していたが、この方法が必ずしも上手く  
いくとは限らないと考える。たとえば、ある目標を設定しておいて、  
それから異文化に入ってフィールドワークを行って結果、ほかの  
目標が見つかるなど、フィールドワークを行って初めて分かる  
事情があるはずだ。なので、やはり研究を行って、何が問題と  
なっているかを見極めた上で実践に移した方が望ましいのでは、  
と考える。また、研究結果を民族誌にまとめて発表する、  
という方法でも、また別の視点から貢献できるのではないかと  
思う。これは「災害」の章でも述べられていたように、有用性は  
あるはずである。

# 開卷

筆者が述べる3つの課題は、そのどこか1つだけ  
解決を怠れば3つの解決が不可能になる。  
相互依存的なものがあふれる感。この開卷の領域  
に於て人類学者は、依然として概念的な筆者の  
提言を具体的に取組みに昇華させる必要がある。

7/20

## 第5章 関係構築

この章の中で「私が一番興味をもったことは、異文化理解という  
ことを考えるにあたって、「文化現象を学ぶ際には、文化に根ざ  
す価値観や判断を一時的に停止すること」が大切なポイントの部分  
である。本文にも書かれていたように、異文化を尊重することが「異  
文化に干渉」であり、無条件に肯定することとは私自身も考え  
ておらず、むしろむしろ単なる無関心、相手に興味がないことが  
あると考える。「理解する」ということは相手のことをきちんとした  
上で、自分と同じところも異なるところも一つの考え方、立場として  
認めるところがある。また一時停止という表現も面白い  
なと感じる。やはり異文化を学ぶ、自文化を学ぶということは  
互いの尊重にはならず、一度は自己判断を止めて、相手を認め  
その上で互いのことを冷静に見極め、相手の論理をふまえて  
判断することが大切だと感じる。

## 7/13 (水) 公共人類学コメントペーパー 5. 開発

異文化研究を学ぶ際、頻りに「多様な視点」という言葉が用いられてくると、多様な視点が存在するだけでは、問題解決の方向が定まらないという筆者の意見には賛成である。筆者がワールドワイドの対象にしている「マニカトコ」の有様ミレパプロジェクトにおいても、これを見守る者の立場に応じて4の意味がめまろしに変わると同時に満ち可解決法は考え出すのが難しく思われていた。公共領域の中で新しい文化を創出するためにはJICAを例に示して開発援助の仕組みや類学の立ち回りについて論じていたのである。私は、ここで2つの専門的知識がうまくかみ合えば、知率的で、結果も期待されるが、逆に衝突可能な強い関係構築することができなければ、お互いに二重の負担になり、開発援助を受ける側もどちらに信頼をおくべきか判断が迫られることにもなるのでは無いだろうか。公共人類学が、絡みつき、様々な分野で構造的なバグや問題を網羅していくことは、この授業を受けていて分かることであるが、JICAという機関にとこの領域がプライベートである場合、バグや問題は置き去りにしてしまうことも容易にできることなのだろうか。また、人類学と開発とは、目的を達成するスパコンの違いがあると思う。むしろ、人類学にとっては「目的を達成する」とは視野に入っておらず、総じて研究欲求は存在する。これに対して開発には何らかの目的、目標等があるはずだ。その違いをどのように乗り越えていくかが課題なのだと思う。

• 文化人類学者が、自分が生まれ育った土地ではないところで、その土地の人々の需要をきいて、新しい文化を創造するというのは少し面白い気がした。ただ、それを慎重にやらねばいけないし、文化人類学者が得意とする相対化は十分であり、どれを優先すべきか判断しなければならぬのかなと思った。

• 経済による社会と文化が変異させられるのは、今更考えたことが多かったのど面白い考え方だと思った。日本のP=文化でもお金を稼ぐためにしているとは考えられるけど、今更本質にそうなのかな、今更経済が中心に動いているのか、色々はものに対して考えようと思う。

- p. 72 の終わりに 「研究から実践への切り替え」とあるが、これはとても難しく、また重要な点だと思った。ここでは「開発」というトピックの中で議論されているが、この点は全ての分野において言える。特に人類学においては、例えば「医学や技術開発と違って目に見える成果を挙げるのは難しい。だからこそ人類学者の脳内と論文の中で論ぜられる問題解決の方法を実践にうつすタイミング、状況、方法が」大きな意味をもつ。「実践」ありきの「研究」を目指すここが必要と言えらる。

(疑問点) 国際開港と比べられる 具体的事例はどのようなものがありますか。

(コメント)

この章を読んで、問題を解決するにあたって、解決策をあらゆる側面から考え、最も最適だと思われる方法を探ることの大切さを痛感しました。私は以前、大学の図書館の本の返却期限がなかなか守られない問題について、大学側が延滞している学生に何らかの措置をとる上からの解決策と、学生が代わる代わるボランティアとなり、延滞する学生に電話をかけ、返却を催促する運動に全員が自主的に参加する学生主体の解決策を考えました。それについて学生にどちらの案がより効果的かアンケートをとったところ、大半の学生が前者をえらびました。このような結果になった理由の1つに日本にボランティア文化が根付いていないため、学生が主体となって問題の解決にあたりことに消極的なのではないかという結論に至りました。これが正しいかどうかは追加調査が必要ですが、この解決策がいかに関係者にとって適切であるかという側面が重要になること、その適切性の度合いによって問題の解決の程度が変わってくることを知りました。この章でも取り上げられていたように何が問題であり、どの解決策が最も適当で、持続的か効果的なのか、バランスを考えながら問題の解決を図ることが特に文脈が絡む問題などでは大切になるのではないかと感じました。

## 第5章 開発

2章、その他2章にも関連して見られる問題として、調査に当たった研究者が現地の政策や開発に自身の知見をのみだけ反映するところが望まれないのかという点が見込める。特に開発という点に於いて、それは現地の人々にとって変化に伴うものとなる。また、それによる利益/不利益を受ける人が出ることがある。このような様々な立場の人々の関係も考慮して、研究分野を活かし、開発を進めることの難しさを伝えた。日本も戦後、東南アジア諸国に於いて戦後賠償として現地開発に携わってきた。それは一定の評価を受けたが、日本製製品の「宣伝」として利用した面、また強引に建設を押し進めた地域もあるというよりは、決してベストではない方法も少なくない。何がベストかを論じるのは、立場にたつた上で変化する難しさを、現地の慣習、格式とある程度尊重して、昇降できるようなアプローチが必要に思う。



P.72 方法論としての文化相対主義は一時停止の ~~舞臺~~ を  
すくめるが、モラルとしての文化相対主義は一時停止の  
解除を求めるところがどういふことが  
よく分からなかった

セクシュン5の研究と実践の切りかえを讀んで、申察というのは  
まずその地域のこと、そこに關係しているアクターのことを考えて  
いかないといけないけれど、それを実践するときにも、  
全てを当事者である人に対してするのではなくて、  
そもそもの構造に対してのアプローチを考えた方が  
良い時もあると思った。

P.82に報恩感覚とグローバル市民としての自覚が大切と  
書いてあったけれど、文化人類学者だけではなく、その感覚は  
大切だと思った。そして、その感覚を發展させるためには  
何が必要なのかなという疑問をもた。

7/20

## 5 開発

・ ミルパにおける4つの視点を全て実現することは不可能と  
あった。筆者は最終的な解決法を明示していなかったが、  
妥協点を見出していくことしかできないのだろうか。

・ 研究と実践の切替えについて、実践の目標にあわせて研究すると  
結論づけていたが、それでは結論ありきの研究になり、柔軟に対応  
できないのではないか？ 実践に関しては JICA などのプロがいるわけで、  
研究のプロである人類学者としての使命を果たせるのだろうか？

## 5章 開発

### <コメント>

開発をすることは、悪いことなのか、よいことなのかよく分からない。開発がうまくいけばそれでよいが、うまくいかなかったら、途中かけのまま放棄されて、その後の進展は望めない。開発は、その土地の人々が望んでおこなわれるべきだが、その土地以外の人々が、利益を求めてとか、NGOなどの団体が開発したいほうがよいと判断して行っている。開発はしてよくなると思っただけで進んで行われるが、本当にそうなのだろうか。住民にとって本当に必要なのか。そのような対話をすることも、人類学者にとって大切なことではないかと思った。

### <疑問点>

P71の「一時的に停止」とはどのようなことなのかよく分からない。

## 『公共人類学』第5章 開発

本文で述べられていたように、公共領域は各集団のレベルによって異なり、各領域によって何が問題となるのかも異なっている。住民、NGO、地方自治体、企業、国家、国際機関というように公共領域を構成する集団の規模は様々である。ある国のある地域の開発を行うとして、各集団によって利益や問題は異なる。公共人類学の視点から考える開発問題は、誰の立場でそれを考えるのか、何よりも当事者がそれを必要としているのかということが重要であると思う。本文で述べられたような「最終目標」がその地域の住民のものでなければ、そもそも開発の必要性や意味はないと思う。現地で直接そこに暮らす人に接しながら問題を発見し、その問題を現地の人と結びつけて解決することが人類学の視点で開発問題に関わる重要な役割だろう。

ただ、開発問題は国際機関や国家、地域住民と行ったどのアクターを考えたときにも経済面がはじめに頭に思い浮かび、人類学という視点と各集団の直面する問題がなかなか結びつかないように感じる。解決策として提唱することを現実とかけ離れた物にせず、さらに他の領域ではなく人類学として開発問題に取り組むという二点を両立した方法が具体的にイメージするのが難しく感じる。

## 5章コメント

国際文化学部に入って、初めて文化相対主義を知り、自分自身が自身の生まれた文化に価値観、考え方が大きく左右されていることに気づき、新鮮だった。そののちに、女子割礼や、嬰兒殺しのことを知り、自分の文化的価値観では、考えられないような習慣だと思ったが、当事者の文化にとっては、意味のあるものであることも知った。しかし、独自の文化だからと言ってその文化をほったらかしにしておくことがいいことなのか分からないということも聞いた。この話を聞いて、自分の中でも文化と向き合っていくことは難しいと思った。先生方の話を聞いていて、いままで受けた授業の中では、そのような習慣をやめさせたほうがいいのか、守るほうがいいのか判断が難しいというところまでしか聞いたことがなく、難しいなかでも具体的に先生方がどう考えているかというのを聞いたことがなかった。今回5章を読んで、この筆者の多文化に対する時の対応の方法を読み、興味深かった。筆者は文化現象を扱う際に、文化に根差す価値観や判断を一時的に停止し、ある程度その文化現象を洞察し、そののちに異文化の論理と自分化の論理を止揚した先に現れる普遍的な人間性に基づいて何が正しいのかを判断すると言っていた。このように、他文化の文化現象をとらえるには、これくらい割り切った考え方が必要なのかなと思った。一方で、エスノセントリックな態度で文化現象を考えないとしても、人は最終的には、自文化を基礎にしてしか物事を考えられないのだと思った。そしてこの方法で、普遍的な人間性を導き出すには、多くの文化をサンプルにして考える必要があると思うし、そこで導き出された普遍的な人間性も力を持っている文化が普及させたものであるかもしれない。だから、ある文化現象にたいして、人が判断をくだそうとするときには、エスノセントリックな視点を意識的に避けたとしても、それぞれの価値観と、その人が知っていることの範囲のなかでしか判断することができないのではないかと、普遍的な判断というのは不可能ではないのかと今のところ考えている。

## 5 開発

課題1. 公共領域の多様な文化をどのように統合し、  
問題解決の方針を立てるか。

課題2. 公共領域において新しい文化を創造するために必要な  
コミュニケーションスタイルの模索

課題3. 研究から実践への切り替えをどのように進めるか。

上記に挙げた3つの課題が本文で指摘されている。

それに着目しつつ、いくつかの実例が示されるかに、全てのプロジェクト  
が切り離されて、マニュアルの部分だけ共有してへるを感じた。

民俗学 コメントシート

2016年7月13日

### (5) 開発

・問題解決をする際に多様な視点の中から何を優先させるべきなのか判断する必要がある、とありました。たしかに様々な視点が存在してしまうと、問題解決の方針も立てづらくなると思います。しかし、その優先順位をつけるのが難しい場合が多いと思います。素朴な疑問なのですが、どのような手順で優先順位というのは付けていったらいいのでしょうか。

## 5. 開発

私は、開発の定義が「発展途上国における<sup>〇〇〇〇</sup>経済発展の促進を目的におこなう国際的な事業である」ということを知らなかった。果たして、本当にそうなのだろうか。私は、そうではない。むしろ、そうであってほしくないと思う。また、この定義の出典を示してほしい。示すべきだと考える。

P75の下から4行目に「最終目標は、農民の所得が<sup>〇</sup>より増えかつ<sup>〇</sup>の食料自給手段としても文化としても維持されること」とある。そのような文化的側面を最終目標の一部とあるとき、これは、そもそも経済発展という目的には適合しないと考える。

# 5章 開発

この章で最も興味したのは、「十分な研究の後に実践が可能になるのではなく、実践の目標にあわせて必要を、研究をせよと考へた方が、研究から実践への移行は円滑になる」という点である。逆に、民間企業に勤めたり考へる私からすれば、(もしかすると民間企業に勤めている人々からしても) 解決すべき課題があり、そのための市場調査に研究を行ひ、実践せよという構図はあたり前のことである。学者が扱う課題は、テーマが広く、1人1人の人生では解決できないものも多いが、自分が出来るレベルまで規模を落とし、目的主義で研究を行う事が、人類学という学問の性質から考へても、意義深いと考へる。

# 民族学 開発

NO.

DATE

2016. 7. 20

本章を読んで納得した点は、異文化に触れ合う際、「一時的に停止」  
することが重要であるという点であった。文化人類学の文化相対主義  
では、自文化の常識を捨て、他文化の価値観、次元で考える必要  
があるとされている。しかし、これは異文化への不干渉の態度を貫いたり、  
無条件に肯定したりし、異文化を根本から理解する助けになってい  
るようである。したがって一時的に異文化の洞察をした後は、  
異文化の論理と、自文化の論理をめぐり、何が正しいのかを理解  
すべきだと述べられていた。私はこの意見に賛成である  
ただ本章で述べられているが、どれだけよい研究でも、その思想が  
広まったり、浸透したりしないと、つまり実践に移さなければ意味がない。  
人類学は、研究地域にばかり焦点を当てすぎて、視界が狭くなってい  
るのではないかという印象を受けた。実際私は大学に入ると人類学  
についての理解は皆無だったし、せめてよい思想があるのに、それが  
一般化されないのはもったいないと思う。

開発

NO.

DATE

開発における公共人類学では、自文化のバイパスを一旦停止した  
うえでその後改めて自文化と異文化をめぐり、何が正しいのかを  
判断する必要があると述べられていたが、開発を行うという  
ことは開発途上国にいわば新しい文化を持ち込むという  
ことであると考えられるうえ、それは先進国の援助によって  
持ち込まれるので、少なからず先進国の意向が多少して  
含まれてしまい、自文化中心主義的にふるまざるをえないの  
ではないか。また、それらの援助が必ずしも現地の人々  
の生活に適合するわけではなく、実践すること以外で  
不適合を確認できないというハイリスタの状態では  
先進国が開発途上国に介入するメリットは  
あるのだろうか。

- 開港の後のF1に行われる政策で現地にネガティブな結果が生じたこと、  
これにどう対応してF1(2)の対応か。現地の経済を成長させること  
が当たり前のように語られますが、経済成長が必要で  
なければ経済よりも大切な価値に重きを置いていこうと  
あると思います。

- 71ページからのことでは、文化相対主義の定義として、「判断を  
一時的に停止すること」が重要で、そのあとに一時停止を解除  
して一定の価値判断に至ることで真の意味では過ぎた  
いかもしれませんが、これと最終的にエス/セントリックな考えかに行  
きつく可能性が大いにあるのではないだろうか。「熱慮」といって  
結局は自分の知っている基準で優劣をつけてくさいかと思  
うかもしれないですが、このときにどう考えを巡らすとよいの  
だろうか。

- 77ページからのメキシコへの支援のことでは「日本の経験を生かす」  
というように言われていますが、筆者の指摘にいろいろあり、  
事前の比較検討が大切だと思っています。共通の条件や相違  
点などを把握しないと有意味な援助がしにくいと考えられます。  
日本国内でも「開港」としてたくさんのおもてなし施設をつくって失敗  
したケースがたくさんあると思いますが、むしろ海外支援と見ると  
むしろ注意すべきです。

「文化現象を扱う際は、文化に根ざり価値観や判断を一時的に停止すること」という筆者の文化相対主義の定義は、「一時的に停止」という部分が重要である。人類学者は異文化を判断しなすべからず、というこの主張は重要だと思つた。特に開発という分野は異文化と向きあふ機会ばかりであり、文化相対主義が唱えられべきところと思う。ここで私が疑問に思つたのは、「開発」とはそもそも文化を対等に見ておらうか。先進国が途上国の支配を可とする。というような文化相対主義とは離れた活動の場ではないのかということだ。

開発が行われつつある地域に対して別の視点から人類学が向き合うことはできるのかもしらぬと思つたが、筆者が行つた内容はミレニアムの人々にとってより良い開発は何か、と考えることであり、開発する側の立場である。

私には、「一時的に停止」という定義で道が開けるのかと思つたが、

「計画的な判断停止の解除」という言葉で文化人類学の立場から開発を説明できるのか、わからぬが、



まず始めに、私は文化相対主義とは異文化について考える際、自文化の判断と  
持ち込まずに、ことだと思、そのこと、異文化について研究する際ある程度異文化に  
関する洞察を試みた後は、文化に根ざす価値や判断の停止を解除、つまり  
自文化を越え異文化について判断するしかないという筆者の考え方は新鮮であった。  
また筆者は人類学者は開発援助の実務者とのミス・コミュニケーションを免れるために  
援助について語るための専門的な言葉遣いつまり「援助の文法」を身につける必要  
があると考え実行に移してゆくが、それに対し開発援助の実務者からは何の  
フォローもなかったのが気が配った。この章を読んだ印象では、人類学者が  
開発のために開発援助の実務者に自らの意見を伝えようと努めているのに、開発援助の  
実務者からは開発のために人類学者の意見を積極的に聞こうという姿勢が感じら  
れなかったように思う。

開発途上国における経済発展の促進を目的におこなう国際的な事業である  
開発において重要なのは、開発を援助する側が一方的に援助するのではなく、  
その途上国が求めているものを援助すべきであると考えられる。ここで、文化相対  
主義に基づいて援助を行うべきではないだろうか。援助する側は先進国で  
あるはずだが、「途上国が自国と同レベルで発展する」という考えをもって援助可  
れば、その開発はうまくいかないだろうと考える。すべての国や地域の発展が同  
様に発展していくとは限らないし、それぞれの国や地域には、それぞれの独自の文化  
があり、発展のスピードも形も違うと考えられるからである。従って、文化相対主義の  
定義にあるように、「文化に根ざす価値観や判断を一時的に停止」し、途上国  
の文化を考え、停止を解除して自文化を見つめ、何をすべきか、どんな援助が必要  
があるかを慎重に判断すべきであると考えられる。

# 民族学 - 開巻

28. 7. 20

実践に踏み切りき、かいたが弱いと感じた。

報恩感覚、グローバル市民の自覚が人類学者特有のものとなり根拠がひんとこない。

## 5. 開発

自分は、JICAや国際援助、また戦前・戦後のアジア開発について他の様集で少し調べたことがある。この際感じたのが、開発援助がいかに関与性を帯びているか、ということだ。実際、開発援助を行ったことで人の“国”の経済力は上がったかもしれない。しかし本当にそこには“国民一人一人”の良さは反映された、とてらうか。本書の3節でこのあげらぬ。マヤ・エカテコの農村開発について、この例が、開発援助に、良さが反映された、と事例があることを示している。マヤコにカトリックの神父が導入され、農村でも改革が行われたが、結果としては定着せず利益も得られなかった。しかし筆者も述べているようにカトリックを批判することは容易であるが、村人が言ったように村衆を作るのは困難である。しかし筆者が本書の最後述べている実践への動機づけは、少し根拠が弱いように感じた。

Suzuki states very clearly his belief that in order to make the transition from ethnographic field work to the use of that work in practical projects one needs to suspend the ethnographer's relativistic abstention from judgement. And certainly, one can not formulate and put in action a plan while constantly second-guessing oneself.

But I think he should consider questioning the need for and ethics of such projects before suspending his own critical thinking. After all, neoliberal economic neo-imperialism works through development 'cooperation' as well. Anthropologists should not make themselves 'into willing tools of such schemes just to have made an 'active contribution' to something.

どの問題においても言えることだが、やはり、何かをすすぐと、現場の文化、慣習等を理解しておくことは重要なことである。今回の開発においても途上国、地域の事情はその土地その土地で異なる。具体例として挙げられたマヤ・ユカテコの焼畑農業に対して、有機シルバプロジェクトは、現地の事情、今回は村人は出稼ぎや行商などの農外収入に依存しているため、手回りがかる有機農業は行えない、ということも把握してはいるが、そのため失敗に終わった。先進国の視点で、主に途上国とひとくくりにして同じように開発支援を行くだけでは、現地の文化、事情に合わず、失敗したり、その後の継続がうまくいかない可能性が高い。そこでネットワークにより、現地の生の声を聞き、文化や生活事情に精通することを得意とする人類学者と開発支援を行う組織が連携していくことは重要である。途上国側により自分たちに合った支援が受けられることが、支援する側にもより有効で効率的な支援を供給することができらるだろう。

特に、現在行われている支援について事後経過を見とくことも重要である。現地の人がどの程度継続できているか、新たな問題としてどんなことが出てきているのかを調査することで支援の質を高められる。とにかくせよ、支援する側の自己満足だけで終わらぬ開発支援が必要である。

## <質問>

181.2 筆者は JICA 研究所の開催したワークショップにおいて、「人類学からこの問題意識を汲み取れるから、このことを認めなければならぬ」と述べた。しかし、この人類学特有の問題意識とは具体的にどのようなものであるのか。

筆者が国際協力プロジェクトの民族誌的評価を志す理由の一つとして、人類学者と国際関係関係者の間に対話の回路を開きたいと述べているように、プロジェクトの方策が必要とされる開発の現場と長期的で持続的<sup>（持続）</sup>な学術的観察と研究が必要で人類学の立場は相容れたいようなイメージがあり、現場からすれば「人類学的見地の介入はむしろ歓迎されるものだろう」と想像できます。そこで二者が歩み寄り、人類学が開発に寄与できるようにするためには、「開発の実践」と前提にせよからも現地文化や風土に合ったものを模索する立場を、人類学側がとるべきだと思います。人類学の学術的立場に固執し続けるのではなく、先進国の支援は絶対善で、技術の進歩が普遍的幸福につながると思えるが、開発関係者の考えは一石を投じ、客観的視点を与える立場にたつては、人類学に必要なことではないかと思います。

私も JICA の意義を受けていたが、  
その疑問は JICA の支援は本当に相手国のためになる支援  
なのだろうか、ということだった。

人類学者の考えと JICA の精神は真逆を向いていると感じた。  
しかし、本文にもあるように人類学者はその専門性を社会一般に  
還元することを考え、計画的に判断停止の解除を行いつつ  
支援団体と手加減して支援を行うことは不可能ではないと思うし、  
そうあるべきだと思う。

## (5) 開発

本章にあげられたマヤ・ユカテコの農村の例のような生活様式の変化、  
雇用環境の変化による後継者の減少やニーズに届えられない状況などに  
よる産業活力の低下などにより、伝統的産業を取り巻く環境が厳  
しい状況になり、存続することが困難な状況となりつつある産業が  
沢山あります。このような環境変化を踏まえ、長い歴史、地方特有の文化  
を持つ伝統的産業を変わりつつある環境に適応にし、持続できる  
ようにとせよには産業関係<sup>者</sup>の努力はもちろん、企業や政府による支援も  
不可欠である。但し、企業や政府が新しい動きを伝統的産業の  
発展に結びつけていく前には、それらの事業を尊重しながら、産業  
関係者の立場に立ち、彼らの気持ち、求めも考えなければなら  
ないと思う。

開発

エピソード改革は支持者が少数で村にも馴染まない  
と言われたのに何故実施されたのか。

## 第5章 開発

NO.

DATE

開発について考えるにあたって、最も大切であると思うことは、その開発が、援助を受ける人々にとってよいことであることである。つまり、私たち先進国からの一方的な開発を行うのではなく、その地に合った開発を考えることが大切であり、それを知るという面では文化人類学的アプローチは大変役に立つ。

しかし、現状の開発はそれが実践できているとは言いがたい。その原因となっているのは、開発援助する側が「リット重視の援助」がある。そのため、文化人類学的アプローチが行われるために、開発の意味の再認識が重要であると考えられる。

Q ヒモツキの援助を脱却するために、行われている取り組み等はあるのか？

## 5. 開発

71ページで筆者は、文化相対主義の定義として価値観や判断の一時停止をあげ、その後価値判断に至ることが「異文化を尊重する」ということの真の意味であるとしている。その後は、批判することもあるということだが、それはつまり排除することなのだろうか。自分の価値と合めない少数派を排除する言い訳になっているようにも感じた。

77ページでは、人類学者とJICAのミスコミュニケーションに関して述べていたが、開発援助側の不理解しか想定していいように感じた。人類学者側が事態をきちんと把握できていないケースはないのだろうか。この箇所に限らず、全体的に「人類学者であること」に絶対の自信を持っているように感じ、危険だと思った。

→81ページの振り返りで人類学の弱点に対する反省が見られた。

「開発に対する哲学をもっていないこと」が指摘されているが、

これはマニュアル通りではない個別の対応をケースに合わせてできるという強みにもなるのではないかと。

## 5. 開発

開発という言葉が自文化中心主義的で進歩主義的なの  
であるという議論は有名である。発展途上、"未開"な  
地を開発する、という考えに基づいているためだ。この論文で  
は開発という言葉を経済発展の促進のために限定してい  
るが、この発想にも疑問を感じる。これは、資本主義をその  
文化を持たない地域に巻きこんでいくようなものである  
こともあるのではないだろうか。変化らすとも、負しくとも  
独自の農業形態で十分な食糧があり幸せを感じて  
いる人びとが暮らす地域にもグローバル化を強いているの  
ではないか。

開発の対象者は本当にそれを必要としているのか？ 開  
発支援を受け入れる者(例えば国家という公共領域)と、実際  
に開発支援を受ける者(現地の人びとという私的領域)の間に  
多くの齟齬があることは否定できな... だろう。

## 第5章

### 開発

公共領域は知識の戦場として議論が戦わされるも無論もではなく、議論のもとで共有知識や解決方法などを遂げるというものだ。しかし、議論と言葉で戦いの境界線はすごいちんみつなので、無駄な戦いに陥らないよう気をつけたほうが良いと思う。

マヤの焼畑という耕作方法はベトナムの少数民族と同様だ。この農耕方法は環境にやさしくないと指摘されていますが、そうではなく、環境にやさしいと聞いたことがあった。炭や灰は天然な肥料として時間をたつて毒を残らずにだんだんなくなっていった、そのところから植物がすぐに生殖できるという理由で、納得させた。少数民族ではないコミュニティーは文明に近づいていない理由に従って、少数民族をしている行動を指摘する傾向がある。しかも、文明に近づいていない少数コミュニティーの行動こそ、文明の光で暮らしている私達より環境を大事をするようだ。

つまり、環境を守るを言えば、少数ではないコミュニティーと少数コミュニティー、どちらの認識のほうが高いのかと、考えさせたものだ。

## 「開発」について

開発のための人類学などについて著者がいろいろ述べていたが、私に言わせれば、開発人類学にはいくつかの不明なところがある。

・まず、文化相対主義への著者の考えについて。ここでは、「新しい文化の創造に寄与する」必要があると著者が指摘するが、新しい文化を創造するとは何か。私が気になったのは、異なる文化を全面的に統合することができるのかという問題である。また決定的に違う文化を一つの文化にしようとしたら、ある文化の相違点を無視し、逆に恐怖や衝突などの反応を引き起こしてしまうのではないか。接触する諸文化また異文化への理解を目指すとしたら、自分かに対して自己反省的な知識を持ちながら、他者に対して、自己と異なった存在であることを容認しようとするの方が、異文化との融和や異文化への寛容が自然に確保できるのではないかと私思う。

・次に、文化相対主義再考に関しては、重要なのは文化に根ざす価値観や判断を一時的に停止することであると著者が述べるが、「一時的に停止」とは何か。「永続的ではない」という答えがあまりにも不明だと思い、どのぐらい、どの程度まで「停止」しなかなければならないかをもう少し説明してほしい。

・最後に、新しい文化の創造への尽力については、グローバル市民としての自覚が必要であると著者が主張する。私がもっと知りたいのは、異文化を理解するために、どの程度まで「グローバル市民としての自覚」が必要なのか、そういう自覚をどう高めるのかなどのことである。

# 「開発」

開発は様々存在するが、それによって利害が異なる。文化人類学では公共人類学者はこれらに平等な目録でアタリを見つけている。また文化人類学者は「開発」にどうして関心しているか、どうしてアタリを置いているか。

## 5 開発

ある地域の開発に人類学が関わっていること、いくつかの公共領域  
というものを意識しなくてはならない。開発する土地の人々、これにより  
恩恵を受ける団体、国家。これら全てを考慮する必要がある。また、  
その土地の人類学はそれと土地に、これは異文化であることではない。これは  
やはり、どのような問題においても人類学が関わっていること、これは  
その土地や対象への理解が不可欠であるということを示しているのではない  
だろうか。人類学は異なる問題を持つ、異なる対象から異文化で  
あるのだ。様々な視点から問題を見つめ、その文化を理解し、コミュニテ  
ーの一員になる。これを経て、人類学の研究が実践に役立つものになる  
かと考えた。また、異文化であり、多様な視点を持つ研究を進めなけれ  
ばならない。というのが公共領域における人類学のあり方である。

・パロト村において、プロジェクトの活動を継続する理由を見出せず、続かなかたり、  
ミルパプロジェクトでは手間がかかり、続ける人がいなかったり、などという例が  
ありましたが、この場合の開発は、現地の人たちに無理に押し付けた  
というような形になるのですか。

・文化現象を扱う際に文化に根ざす価値観や判断を一時的に停止し、  
最終的に、自らの価値やモラルを適用すると述べていたが、自国の  
モラルと、その文化現象、あるいは風習が異なる場合、干渉することか  
肯定されるのですか。

マヤ・ユカテコ民族の農村では、なぜエヒードが導入されたからといって人口が5倍以上にまで急増したのか？他の村でも同様の現象が見られたのか、それともこの村に特有の状況だったのか。そして、ミルパを現実的に続けていくのが難しいなかで、文化的に保存するとはどのような状態を目指しているのか。日本の伝統工芸や伝統的な農法、漁法のように、シンボルとして残していくのだろうか。そのような切り取られた形では、今までのように生活に根ざした文化にはなり得ないのではないかと思う。「どうしようもない」という村人と筆者のコメントがあったが、課題1の問題解決の方針の定め方は本当に正解が無く、ミルパの保存と経済的な安定の両立を目指すことに行き詰まりを感じた。また、人類学者が異文化への判断を一時停止した後、それを解除して異文化を批判、受容することは確かに理にかなっているが、それをされた異文化を保持する側の人間からすれば、こちらの理解が不十分だ、わかってもらえていないといった感情を抱き、溝が生まれてしまうように思った。

## 5章 開発

開発・発展について考える機会とは他の言義を通じても比較的多くあるが、公共領域・公共性を前提として捉えることは無かった。

本章では文化相対主義に対する誤解・再考について触れられているが、定義における「一時的に停止」という部分に関する鈴木氏の主張・解釈と読み分け、についても文化相対主義に対する再考と自ら自身促される。開発分野の問題解決の方針を立てるにあたり、相対化という方法では不十分であるという点は驚きであった。

5章「開発」を読んで、まず、開発援助を行う団体は、開発をする地域に住む人(その地域の代表など)に要請されてプロジェクトを行うのか、それとも開発援助が必要である地域を探し出して開発援助を行うのか、ということに疑問に思った。

三つの例が挙げられているように、開発をしていくうえで、効率性を重視していくのか、またはその地域の文化・伝統といったものを重視していくのか、といった点は、重要な点であると感じた。開発援助団体としては生産性や効率性というもの優先して開発を進めたいと思っているのだと思う。しかし、その地の人々にとってはその地の文化やアイデンティティといったものが大事である。開発をする地域の人びとの価値観と開発援助をする人たちの価値観は異なる。ここで、本章に述べられているように、「文化に根ざす価値観や判断を一時点に停止し、その異文化に向き合う」という文化人類学の視点が「必要であるのではないかと思う。開発をしていく上で、現地の人々の価値観や考え方といったものを聞きながら、開発を進めていくことが重要ではないか。

「開発」は開発途上国が経済的に発展するよう、先進国が  
開発国へ入り込むことである。したがって19世紀、20世紀  
前半の植民地主義の時代の、「野蛮な地域を文明化する」  
という思考に寄りかいたために、文化相対主義の意義を  
再考し、意識したから開発しなければならぬ。  
また、開発の意義についても熟考しなければならぬ。  
本書で述べられているメキシコのシリパの例では、  
農民が非効率な農業で貧困に苦しむのをなくせよと  
シリパの代わりに他の働き方を提案すると、シリパの文  
化も壊すことを推進することにすることが示されている。  
このジレンマの中でどのように働けばよりよい成果を  
出すことができるのかと考えることをやめずに開発  
をしなければならぬ。

## 第5章 「開発」

- ・ PAPROSOC の民族誌的評価では ミレパの分析と比べ「実践」があるという違いがあることがわかった。どちらも対象の地域にすむ人々の立場に依った考えを述べているように感じることができた。
- ・ 一方で「実践」するためには、どうも考えていく際に「グローバル市民としての自覚」も「人類学者に固有の報恩感覚」というあるような書かないことが挙げられていて疑問に思った。むしろ筆者が述べるような感覚を持つべきにこしたことはないが、はっきり言えば実践でどうかはお金があるかないかということにかかっている部分があるのではないかと思う。しかし、お金といわずに具体的な問題まで考える必要があるのかわからなかった。

# 開発

- 自文化のバイアスを自覚し、価値観・判断を一時停止可? とう作業後に、他文化が明らかに非効率的・悪習である場合 (サテーターなど) 批判をしないか?
- マヤ、エプタコ、例) にある「4つの視点」について。  
どの様にプライオリティを付けかかっているか?
- ある視点を、他の視点で相対化する時にどのような  
視点が並列している... 問題の解決がムズカシクならかきかかるとある... とあるが、  
2つ、3つ、4つの視点は順位を付けるという = とあるのか。

1. 文化相对主义的道德理念在于, 不干涉、无条件地肯定异文化。但是其要义并非永远地停止对文化的价值判断, 因为对其文化的一定程度的价值判断才是对其真正的尊重。评价与不评价取决于我们的出发点, 当我们从本文化出发时, 对异文化彻底的尊重与自由权利是必要的, 但当我们从全人类的整体角度出发, 对异文化的价值判断乃至改造则是一种人类自我发展的必要进程了。

2. 对异文化的理解研究与开发改进是相辅相成的。在其过程中必须要注意的是对异文化及其民众彻底的尊重与沟通, 任何行为都应当建立在双方互相的理解与合作的基础之上。一厢情愿或不从实际出发的行为都有可能对文化产生摧残的作用。对于相对落后的文化, 沟通与宣传教育是十分重要的开化方式。